

付載 2 杏葉唐草文軒平瓦小考



大田地区中心街開発にともなう近年の調査で、平安時代末期に東海市加木屋地区の古窯で焼かれた瓦が、砂堆上の各調査区から発見されている。

所謂寺院跡のように、大規模な瓦溜まりや堂宇の存在を直接裏付ける遺構が検出されているわけではなく、資料も破片が大半であるが、莊園の特産物として京都を中心に供給されていたものであり、その生産地での動向を探る上で貴重な発見である。

古窯で焼かれていた多様な瓦のなかでも、杏葉唐草文軒平瓦は最も特異な存在である。一般に平瓦瓦当の意匠のなかで唐草文は線対称に展開するものが大半であるが、この杏葉唐草文は左右に上下が対向する点対称配置である。考古学の呼称では「杏葉」と形容してはいるが、5裂した花弁のような意匠が特徴的で、その優美な文様はアールヌーヴォー期の植物文様を連想させる。

この瓦は古くから觀福寺での採集（詳細や現在の所蔵は不明）と熱田神宮寺での出土が知られており、社山古窯と論田古窯で焼成されたことが判明している。

論田古窯は加木屋地区に存在し、權現山古窯や大府市の吉田1・2号窯などとともに大田川水系に属する。一方社山古窯と加木屋1～3号窯は丘陵を隔てた横須賀の谷の信濃川水系に属する。この両水系は下流で中心集落を擁する砂堆を共有するため、基本的には同一地区の古窯址群として捉えてよいだろう。

この分布図で明らかなように、社山・權現山・吉



加木屋地区の古窯分布図

田・論田の各古窯の分布は直径 2 キロ範囲に収まり、日常の往来には何ら不便無い距離関係にある。また観福寺や今回の調査地点を含む大田の集落までの距離は 3 キロ前後であり、地理的にも河川水系を共有する同一地域範疇と理解して差し支え無い。

これら加木屋地区の古窯址群で焼かれた瓦の多くは、京都の鳥羽離宮にもたらされていたようだが、先述した杏葉唐草文軒平瓦だけは遠隔地からの発見が無い。

観福寺の創建は大宝 2(702) 年に行基菩薩によると伝えられているが、縁起の真偽はともかく、秘仏本尊の十一面觀世音菩薩立像（県指定文化財）が 10 世紀末から 11 世紀初め頃の製作と考えられることや、本堂内宮殿（国指定重要文化財）^{註 1)} の建築年代は建物の背面の墨書に宝治 2(1248) 年とあり、少なくとも平安時代後期には本尊を祀る堂宇が営まれていたことは確実のようである。

熱田神宮寺は木津山神宮寺大薬師とも称し、創建年代は不明であるが、太政官符尾張国司の項目中に「応置、神宮寺別当・御船宿禰木津山を補任、経論一万五千九百巻の写経、仏菩薩四天王像 1028 体の造立、神体 5 軀造立及び神宮寺一区造建、如法院一処、塔 3 基、別院 3 処の造建を命ず。承和 14(847) 年」とあり、以上を含む、昌泰 3(900) 年の太政官符までの 6 通の公文書がある。また、「延喜式」卷 3 に金剛般若經転読「本朝文粹」寛弘元(1004) 年大般若經供養の記事があることなどから、平安時代には確実に存在していたことがわかる。

文永 7(1270) 年の「熱田神宮踏歌祭頌文」などには、神宮寺薬師堂薬師如来は多くの参詣客を集め大いに繁栄したことが記されている。

一般に神宮寺は所属する神社が主体的に運営することが多いため、仏教の宗派を特定できないものも多い。熱田神宮寺の場合も本尊として薬師如来が祀られていたが、元禄時代の堂宇修理記録では「本尊薬師如来の坐像。・・・此堂もと八剣宮の境内にあり・・・八剣宮の本地仏と称せし云々」とも伝えられている。また、宝暦 12(1762) 年の『張州雜志』には「如法院は蓬萊山と号し、熱田神宮寺座主、初め天台宗輪王寺に属するも、近世には野田密蔵院に属すると云う。権座主に円定坊・宝蔵坊・地福院があったが、今二院廃すと云う。」とあり、わずかに天台宗との繋がりを伺い知ることが出来る。

観福寺の存在する木田の地は『吾妻鏡』などの史料により 12 世紀末以前からの熱田社領であることが判明しているが、出土した杏葉唐草文軒平瓦の存在は、両地が熱田神宮と天台宗という神仏二重の教線によって結び付いていた可能性をも示唆するものである。

この他に、当地と天台宗の関係を考える上で、僧良忍の存在は重要である。融通念佛の開祖で聖応大師とも呼ばれる良忍は知多郡の領主秦道武の子で、延久 5(1073) 年の生まれとされている(1132 年没)。母親の名前はわかっていないが、熱田大宮司の娘であったと伝えられている。

現在の東海市富木島^{註 2)} 町貴船には宝珠寺がある。平安時代に在原業平が創建したと伝えられ、

註 1) 宮殿は、本尊を安置し本堂内に祀られ、建物の背面の墨書により、宝治 2 年(1248) の建立であったことが分かる。大きさは桁行 1 間、梁間 1 間、入母屋造、妻入。正面には方立、脇羽目を入れて双折棧唐戸を吊り、柱間に下部に横連子の格狭間を嵌め、柱上に頭貫を通し、先端に木鼻を出し、柱上に尾垂木付の三手先斗栱をおき、両脇には本蔓股を入れる。この宮殿は、木鼻に大仏様と呼ばれる縁形が施されている点に大きな特徴がある。さらに、柱の大面取り、蔓股、斗栱にも鎌倉時代の建築様式が認められ、しかも、建立年代が明らかな点でも貴重である。

註 2) 富木島 = ふきしま：富田・木庭（こんば）・姫島の 3 村の合成地名

室町時代に曹洞宗に改宗されたことが記録にある。旧地名は知多郡富田郷であり、東海市の紹介では、「平安時代末に融通念佛宗の開祖である聖応大師良忍上人が、その父である藤原道武の帰依によって正法山一心院を建立し、藤原家累代の墓所(正法塚/市指定)としたといい、藤原道武は業平塚(市指定)の脇に開基を在原業平とする寺院(宝珠寺)を復興し、業平等の菩提塔を建立したといわれています。」とある。この宝珠寺近くには地元で「業平塚」と呼ぶ五輪塔が集められた場所があり、現在では鎌倉期の特徴を持った五輪塔7基が残っており、その地が移転前の宝珠寺の位置であるという。ここに現れる藤原秦氏兵曹道武の詳細は不明であるが、今昔物語卷第28には官職・官位共に同じの「近衛舎人左近将曹・秦武員」なる人物が登場することから、同族である可能性もある。近衛府の将曹や衛門府の志の唐名を兵曹と言い、位階は従七位下に相当するようである。この宝珠寺や業平塚のある場所は、大田川支流の渡内川左岸で、北に延びる荒尾谷の入り口を睥睨する地でもある。

良忍の出自にまつわる歴史的事実を介し、天台という属性と熱田大宮司と当地の縁故関係が伏線として敷設されていた上に、観福寺の存在や熱田社領としての支配関係がより強固に確立されていったと理解することも可能であろう。

このような地域の伝承も含め、古窯やその製品と中央の歴史との関係、とりわけ寄進地系荘園の動向や有力寺社勢力との関係、また院政の動向が濃厚に反映された歴史的背景については、既に『権現山古窯址』(1965)の報告書に於いて久永春男氏がさまざまな可能性を考察されている。多少長くなるが、報告書そのものの稀少性やそこに提示された内容の重要性を鑑み、第六章全文をここに引用しておくこととした。(以下引用)

第六章 権現山古窯址の歴史的背景

I

社山古窯と論田古窯とは同一意匠の巴文軒丸瓦、宝相花唐草文軒平瓦、杏葉唐草文軒平瓦を出土し、伴出した行基焼はともに社山様式であつてその時期もひとしく、あきらかに同一寺院の瓦を手分けして焼いたことが推定されるが、山茶碗と山皿の作りには作り癖にちがいがあり、別個の工匠の手になるものとみとめられた。(註1)

権現山古窯は社山古窯と同一意匠の蓮華文軒丸瓦を出土しているが、伴出した山皿はすべて高台をもたず、行基焼第

二型式(石根様式)に
なりきつているとともに、その、山皿と山茶碗の作りは、社山古窯のそれとも論田古窯のそれとも作り癖を異にし、権現山古窯の工匠

| 軒瓦の種類と文様 | | | 社山古窯 | 権現山古窯 | 論田古窯 | 熱田神宮寺 | 観福寺 | 安楽寿院 |
|----------|------|---------|---------|-------|------|-------|-----|------|
| 軒丸瓦 | 第1類 | 蓮華文 | 大形 | ○ | | | | |
| | 第2類 | | | ○ | | | | |
| | 第3類a | | 胡桃浮彫 小形 | ○ | ○ | | | |
| | 第3類b | | 胡桃沈刻 小形 | ○ | ○ | | | |
| | 第4類 | | 右廻り 大形 | ○ | | | | |
| | 第5類 | | 左廻り 大形 | ○ | | ○ | | |
| 軒平瓦 | 第1類 | 宝相花 唐草文 | 大形 | ○ | | | | ○ |
| | 第2類 | | | ○ | | ○ | ○ | |
| | 第3類 | | | ○ | | | | |
| | 第4類 | | | ○ | | ○ | | |
| | 第5類 | | 杏葉唐草文 | ○ | | ○ | ○ | ○ |